

群 教 セ	F09 - 01
	平16.224集

「ほっとルーム」に 登校する生徒への自立支援

——教師チームによる支援と

生徒間のピア・サポート活動を通して——

特別研修員 田嶋 弘典 (藤岡市立小野中学校)

《 研究の概要 》

本研究は、「ほっとルーム」に登校する生徒が充実した生活を送り、学習や人間関係作りに対して自信を持てるようにし、結果として自分で考え判断し自立的な生活を送ることを目的とした。そのために教師チームによる学習支援とピア・サポートによる温かい人間関係作りを取り入れた。これらの支援を通して学習する習慣が少しずつつき授業に出る回数も増えた。また休み時間に野球をするようになるなどクラスメイトとのかかわりも見えてきた。
【キーワード：教育相談 ほっとルーム チーム支援 ピア・サポート 自立】

主題設定の理由

現在本校には、「ほっとルーム」登校生徒が、2年3年に数名いる。彼らが、「ほっとルーム」登校になった理由として、保護者や本人の話から人間関係のトラブルがもとで教室に入れなくなってしまったということが考えられる。加えて現在は、たとえ授業に出たとしても学習が分からないという学力不足が、教室復帰に向けての大きな障害になっている。人間関係作りにおける挫折と学力不足という2つの要素が、目標の喪失、何事に対しても意欲不足という結果として表れてきてしまっていると考える。そこで、本研究では、遅れてしまった学力を取り戻し、学習に対する興味や自信をつけること、他者と心が通うよさを味わうことで、人間関係作りに対する自信を持つこと、この2つを大きな目標とする。これらの目標達成を教師が支援し、生徒が、充実した学校生活を送ることで、的確な判断・自己決定のもとに自立した行動ができるようにしていくことを目指し上記の課題を設定した。

目標

- (1) 教師チームの学習支援により「ほっとルーム」登校生徒が、学習に対する興味を持った
り、分かる楽しさを味わえるようにしたりし、充実した時間を送れるようにする。そして、
その積み重ねの結果として学習に対して自信を持てるようにする。
- (2) 暖かい人間関係作りを目指して道徳や学活の時間などに、ピア・サポートのトレーニング
を学習集団に対して行う。そして、「ほっとルーム」登校生徒が集団にとけ込みやすいよ
うにする。

構想

図1は、自立に向けての構想図である。チームによる学習支援と温かい人間関係作りを支援
していくことで、自信をつけ、自立していくことを目指していく。

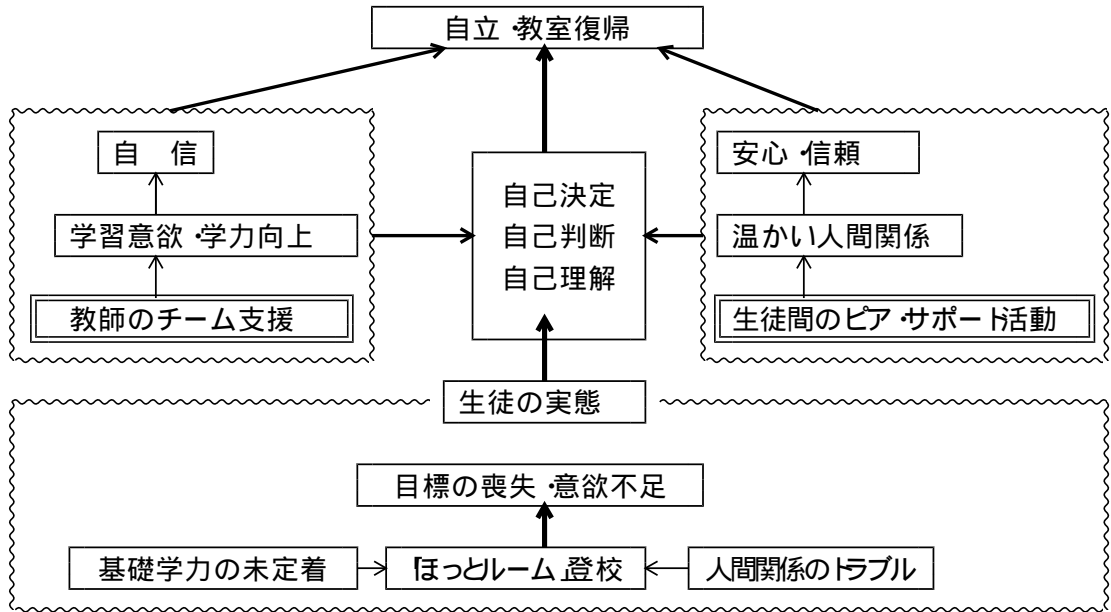
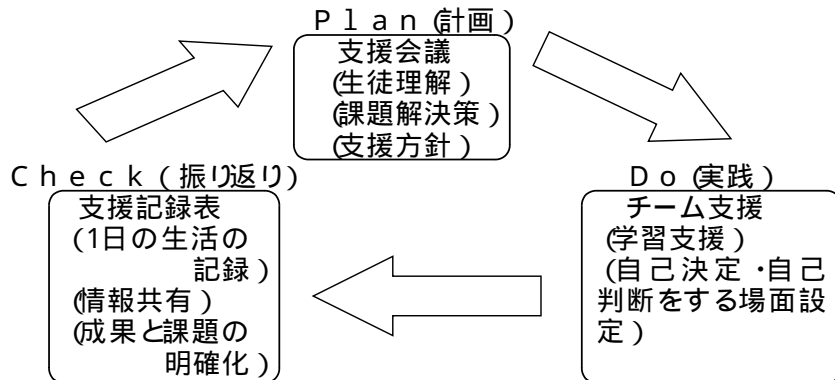


図1 自立に向けての構想図

研究の内容

1 教師のチーム支援

(1) 構想



(2) 目的

教師チームが連携を取り、「ほっとルーム」で学習支援し充実した時間を過ごせるようにする。そして支援する内容を同一歩調かつ段階的に行うことで、効果的に学力や自信をつけられるようにする。

生徒の状態を共通理解し、最も生徒にふさわしいかわり方ができるようにする。そして、生徒が人間関係のよさを味わえるようにする。

生徒が、自ら判断したり決定したりする機会を意図的に作り、自主性が身につけられるよう支援していく。

(3) 指導方針

教師チームが、Plan (計画) Do (実践) Check (振り返り)を円環的に行い、日々変わる生徒の実態を的確に把握し、Checkで成果と課題を明らかにする。そして、Planで課題解決の方針をたて、生徒にふさわしい支援を行えるようにする。

(4) 支援のチェックと計画

支援記録表

毎日支援員が記録し、情報交換や指導方針を立てるときに役立てる。

「ほっとルーム」運営会議

定期的な学年会議に支援員を交えて情報交換を行い、成果と課題を明確化し解決策を立て、今後の指導方針を立てる。

(5) 実践

【4月～6月】学習体制の確立

支援のPlan（3人の教師で）
 担任、支援員が相談で以下のこと支援するように決める。
 生徒との関係作りのために主に担任、副担任、支援員の3人で支援にあたる。
 生徒の意思を尊重し、学習プランを立て自主性を育てる。
 性格検査を実施し、生徒の性格を客観的に理解する。そして性格を考慮した支援の仕方を工夫する。
 学習しやすいよう問題集など補助教材を整え、教師が同一歩調で計画的に支援にあたるようにする。



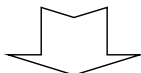
Do（英語・数学を支援）

（中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）



Check（生徒の様子と振り返り）

（中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）



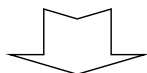
【7月】チーム支援と自己決定

支援のPlan（7人の教師で）
 学年の教師6人と支援員よりなる「チーム支援会議」で上の解決策として以下のことを決める。
 強制的に授業に参加させるのではなく、本人と相談した上で「ほっとルーム」か「クラス」で学習するか決めるようにする。そして、学習に自信を持てるようにしてから教室復帰を促すこととする。
 「ほっとルーム」での学習時間が増えることに伴い、チーム支援の人数を増やし、学年の職員6人と支援員で数学と英語を同一歩調で継続して指導していくこととする。
 自主性が身に付くように「ほっとルーム」の環境作りを、生徒の意志を尊重して行う。

<学年教師チームでの支援表>

6人の教師が一週間に一こま、数学と英語を中心に個別指導にあたる。下の表の（ ）は個別支援する教師を示す。それ以外は、本人が授業に出たり、支援員が対応したりする。

	月	火	水	木	金
1校時	音	体	英	数	技家(T5)
2校時	体	理	数(担任)	英(担任)	美
3校時	数(T2)	英	理	国	理
4校時	英(T6)	国(T3)	社	体	国社理(T4)
5校時	総	学	数	総	社
6校時		社	選	総	国



Do (英数と自己決定支援)

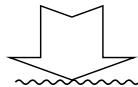
(中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)



支援のCheck (生徒の様子と振り返り)

(中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)

【9月～12月】自信と自主性



支援のPlan (教師の特性を生かして)

チーム支援会議で以下のように支援することを決める。

それぞれの教師が、自分の教科や得意な分野を支援することも取り入れる。公民に興味を示したので、特に社会は、個別支援をして自信を持てるようにする。(解決策)

どの先生でも一生懸命学習できるようチーム支援の引き継ぎを生徒を交えて行い、課題を明確にして支援する。(解決策)

進路選択の時期に入るが、本人の意志が決まっていないため情報の提供を行い、自らにふさわしい進路選びができるようにする。



Do (教師がそれぞれの教科を支援)

それぞれの教師が担当する教科を支援した。社会では、クラスでの授業と同様に板書するなどして支援した。担任と支援員は数学を協力して支援した。英語ではクイズ形式のものも取り入れた。

進路選びに関しては10月に進路適性検査を行い、自己の興味や適性を明らかにした。

11月の進路相談では、検査結果の興味や適性を生かすとともに、高校の情報などパンフレットを提示し支援した。



支援のCheck (自信と自主性が出てくる)

(中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)

(6) 考察

Plan Do Checkの円環的な支援をチーム支援会議で相談しながら行った。具体的に支援の成果と課題を明らかにしながら会議で新たな方針を立て支援するというサイクルで生徒にかかわった結果、以下のように生徒に変容が見られた。

最初に、4月から3人体制で「ほっとルーム」で個別支援を行った。そのことによって「個別支援では意欲的に学習する。」という成果と「授業に出た時には意欲的でない。」という課題が明らかになった。

そこで、7月の支援会議で解決策として「ほっとルーム」での支援時間を増やし、充実した

時間を増やすために7人で支援する。」という方針を決め、英語と数学を計画的に支援した。

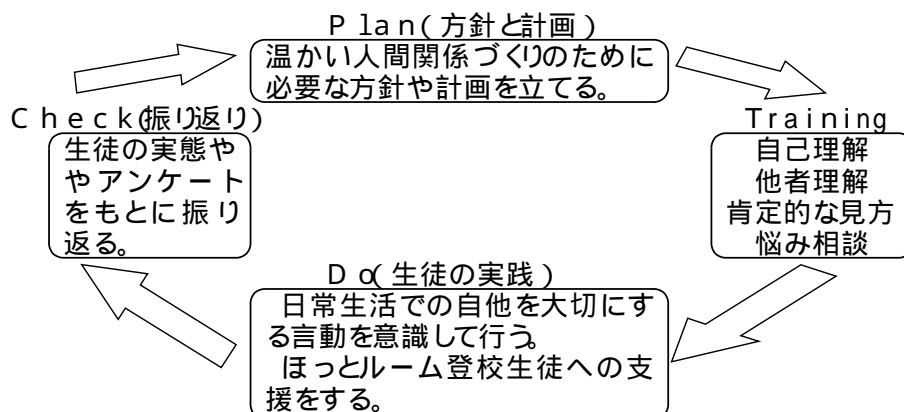
そのことにより「個別支援の学習時間は増え充実した生活ができるようになる。」という成果と「先生によって生徒の態度が変わる。」という課題が明らかになった。

9月の支援会議で解決策として「それぞれの担当教科を個別支援する。」という方針を決めた。数学と英語の2教科のみを支援するのでは、かわりに限界があったが、7人の教師の特性を生かした支援により、生徒は、それぞれの教科の個別支援を受けることができるようになり、生徒の中にあるいろいろなよさが引き出されてきた。

このような支援の成果として5教科については、12月の実力テストで今までの最高点をとるなど確実に学力がついた。実技教科については、授業に参加する回数が増え、美術では作品展に代表として出品するなど力を発揮した。特に支援目的の一つである「自信」に関しては4月から継続して数学を支援し続けた結果、かけ算九九がおぼつかなかったのが、11月には連立方程式まで解けるようになり「やればできる。」という手応えを感じられたようだった。目的の一つである「自主性」に関しては、支援していく中で、自己決定できる場面を多く取り入れた結果、11月の進路相談では自ら進路を決定し、その後の生活に充実度が増した。このように計画的に教師が、生徒の様子を見ながら支援を振り返り、成果と課題を明らかにし、課題の解決策として新しい方針を立て支援へとつなげていくことが生徒の成長にとって効果的であることが明らかになった。

2 生徒間のピア・サポート活動（温かい人間関係作りを目指して）

(1) 構想



(2) 目的

クラスメイトが温かい人間関係をきずくことで、「ほっとルーム」登校生徒をクラスに迎え入れやすい環境を作る。

(3) 指導方針

教師が、Plan(計画) Training(練習) Do(生徒の実践) Check(振り返り)による円環的なピア・サポート活動を行うことで、温かい人間関係作りに必要なことを一人一人が身につけ、温かい雰囲気のあるクラスになるようにする。。

(4) Training の計画（ については実践を次ページ以降に記載）

時期	方法	目的
7月	『心温まる言葉 傷つく言葉1』	・温かい人間関係をきずくために必要なことは何かを具体的に 知ること、人権感覚を高める。
9月	『エゴグラム』	・自己理解を客観的に行う。
9月	『リフレーミング』	・自己肯定感を高める。
10月	『クラスメイトの いいところさがし』	・他者を肯定的に理解し、自分も肯定的に他者から認められ る。学級全体を前向きな集団にする。

11月	『ホットルーム登校生徒を支えよう』	・協力、思いやりの気持ちを行動にする。
12月	『心温まる言葉 傷つく言葉2』	・Trainingの成果をチェックする。 ・生徒やクラスの変容を確認する。

(5) 実践

ア 『心温まる言葉・傷つく言葉1』(温かい人間関係づくり)

Plan (方針)

生徒たちの日常生活を見ると相手のことを考えない行為や言動が多い。しかも、それらが相手を傷つけることを理解していない様子も見られた。そこで、人を傷つけることがどういう行為や言葉であるか明らかにする。また、人の心を温める行為や言葉も明らかにし、温かい人間関係作りの基礎をきずくことをねらう。具体的には小野中全体の傾向を明らかにし一覧表にまとめる。そしてクラスに戻して、一覧表をもとに温かい雰囲気にするためにどうしたらよいか考える。

Training

「小野中生 心温まる言葉、傷つく言葉」の制作の流れ

「心温まる言葉、傷つく言葉」の全校アンケートを実施。

個人のプライバシーにかかわるものを除いて集約。

下の資料を全生徒に配布、校内、教室掲示をおこない、温かい雰囲気作りの啓発を促す。

集約したアンケート

<全校アンケートによる・小野中生徒、心温まること・傷つくこと>
(かけられてうれしかった言葉)

「ありがとう」	「手伝おうか」
「最高」	「おめでとう」
「すごいね」	「すごいじゃん」
「やさしいね」	「助かったよ」
「お前ならできる」	「大丈夫だよ」
「話しやすいね」	「気にすんなよ」
「がんばれ」	「無理しないでね」
「君のおかげだよ」	「ずっと友達でいたい」
「一緒に～しよう」	「素敵な友達だよ」
「おはよう」	「ナイス」
「えらいね」	「ごめんね」
「こんにちは」	「うまくなったな」

(してもらってうれしかったこと)

「落ち込んでいる時に勇気づけてくれた」
「困っている時に手伝ってくれた・助けてくれた」
「親身になって相談を聞いてくれた」
「悩み事を相談してくれた」
「欠席の時に電話をしてくれた」
「ほめてもらった」
「あいさつをしてくれた」
「分からないことを教えてもらった」
「物を忘れたとき貸してくれた」
「信用された」
「病気やケガをしたとき心配してくれた」
「一人でいるときに仲間に入れてくれた」
「移動するときに待っててくれた」

(言われて傷ついた言葉)

「むかつく」	「はぁ～」
「じゃま」	「くらい」
「うざい」	「最悪」
「あっちへいけ」	「嫌われているよ」
「うっせ」	「ちくったな」
「死ね」	「来るな」
「ばか」	
「何お前」	
「きもい」	

(されて傷ついたこと)

「わけもないのに笑われる」	「席を離される」
「無視・しかと」	「仲間はずれにされる」
「あだ名で呼ばれる・呼ばれ続ける」	
「苗字のことで何か言われる」	
「にらむ」	「だまって物を借りられる」
「暴力」	「デマを流される」
「落書きされたこと」	
「陰口を言われる」	
「悪口を言われる」	
「ズボン下ろし」	
「体型のことを言われた(デブ・ちび)」	
「失敗したことを笑われた」	
「イタズラ・からかわれる」	
「あいさつしたのに返されない」	
「物をかくされる」	
「一生懸命していることを ばかにされる」	

上のアンケートを使った温かい学級の雰囲気づくりに向けた学級活動の流れ

学級活動の時間に上のアンケートを生徒に提示する。

特に、クラスで顕著なものをあげ、課題として明確化する。

具体的に改善していくためのスローガンを考える。

スローガンをまとめたものを下の資料とし、生徒に再提示する。

7月の中旬に学活や道徳の時間を中心にして人権について学ぶ人権集中学習を行いました。「人権とは何か」ということからはじめ、人権を大切にしていかに具体的にはどうしたらよいか」ということを考えました。

人権とは、人が幸せに暮らす権利である。

<クラスとして人権を守るスローガン>

みんなが一人一人を大事にして思いやりを持ち、どんな時も相手を大切に友誼と笑顔で満ちあふれるようにしよう。

自分と相手を大切にしよう

笑顔でいるためには理性や思いやりをしっかり持とう

言う前に考えて 相手の気持ち 相手の心

笑顔を守る強い意志を持とう

思いやり+理性=笑顔

相手を大切にし 友情 思いやりの気持ちを持ち 毎日笑顔

やさしくでき 強い心を 幸せになれる固い友情を 最後は笑顔で自分も相手も

し	親切に
あ	明るく
わ	笑って
せ	正々堂々と

<感想>

軽はずみな気持ちで言ったりした言葉でも、相手にとってはとてもいやな言葉なので気をつけようと思った。

3-3で傷ついたことが多くてびっくりしました。私も人に傷つくようなことをしてしまったことがあります。これからは、この授業を生かしてなるべくそんなことがないように心がけたいです。これからはもっと人の気持ちを考えて行動したいと思った。

自分が言われていやなことを他人にするのは改めていけないことだと思いました。のりで「はあ〜」とか「ばかだなあ〜」とかいってしまったけど、これからは絶対に言わないように気をつけたいです。

みんなに言われて嫌なことは一緒なのに、他人には自分が言われて嫌なことを言っているなんて、なんだか矛盾しているなあと思った。私も改めてふだん使っている言葉を見直してみようと思った。

私たちがふだん何気なく使っている言葉でも、相手が傷ついたりしてしまうと思うと、もっと相手のことを考えて思いやらなければいけないと思いました。この授業を通して言葉づかいや気持ちを改めたいです。

Check (振り返り)

上の生徒の感想に見られるように、自分の言動を振り返る生徒が多く見られ、特に「何気なく使っている言葉、軽はずみな言葉」こそ注意しなければいけないことに気づけている。また、そのためには、「相手の気持ちを考えた言動が大切である。」という結論をだしている生徒が多く見られた。そうすることによって相手も自分も大切にできるということにも気づけてきている。

イ 『リフレーミング』(自他ともに肯定的にとらえる)

Plan(方針と計画)

上の Check ではっきりしたように多くの生徒が「温かい人間関係をきずくために相手の気持ちを考えて行動したい。」と考えている。相手の気持ちを考えるために自分はどういう性格で、他者はどういう性格であるか自己理解・他者理解することが必要になる。そして自分のことも相手のことも肯定的にとらえることが大事になる。そこでリフレーミングを取り入れる。

Training

< Training の流れ >

リフレーミングのワークシートに短所を書く。

隣の人とシートを交換しリフレーミングする。(リフレーミング辞書の使用)

最後に感想を書く。

生徒が行ったリフレーミングの例

<書き換えた言葉>	<リフレーミングすると>
言いたいことがはっきり言えない	争いを好まない
のんびり	細かいことにとらわれない
まわりに影響されやすい	心配りができる
好きなことだけやる	味のある 個性的な
すぐおこってしまう	感受性が豊か

<生徒の感想より>

自分の短所で、「ずーといやだなー」と思っていたこともリフレーミングして長所に考えたらしは気持ちが楽になったように感じました。

短所もおおらかに考えると良いところがでてくると思いました。人を見るときは、おおらかに見たいです。
 短所も長所になるんだなと思った。これからは、短所をいやなものとして考えないで直そうと心がけたいです。
 短気という私の短所も見方を変えれば長所になることがわかったので、友達の短所も長所に考えることもできると思いました。

Check (振り返り)

生徒の感想より「自分の気持ちが楽になる。」「見方を変えると自分の短所も良いところが出てくる」など自己肯定感につながる内容が見られた。そして、「友達の短所を長所に変えることができる。」「おおらかに人と接していきたい。」など肯定的に自分のことも相手のことも考えて人と上手に接する方法も考えていることが分かる。

ウ 『「ほっとルーム」登校生徒を支援しよう』

Plan (方針と計画)

自分のことも相手のことも肯定的に見られるようになってきた生徒たちであった。しかし、ほっとルーム登校生徒をクラスに来るように呼びに行くことはできてもクラスにほっとルーム登校生徒が来た時に話しかける生徒が少ない傾向が見られ、それがほっとルーム登校生徒をクラスに入ることをつまらわせているのではないかと考えた。そこでクラスメイトがほっとルーム登校生徒を支えられるようになることをねらってこの計画を立てた。

Training

< Training の流れ >

- 1人2案以上、「ほっとルーム」登校生徒に対して援助できることを付箋紙に書く。
- 6人1グループの班になり、ブレインストーミングする。
- 種類分けしたものをそれぞれの班が発表する
- シェアリングし、方針を立てる。

ブレインストーミングしてグループ分けした例

会話を楽しむ

- ・話をいっぱいして教室にいることを楽しいと感じさせる。
- ・毎日の楽しかった出来事を話して教室が楽しいことをアピールする。
- ・積極的にA君に話しかける。
- ・週に1回A君に全員が話す機会を作る。

呼びかける

- ・授業の前に男子だけでなく、女子も呼びに行く。
- ・日直が授業前に呼びに行く。
(むりやりにならないように)

友情を深める

- ・みんなで相談室で遊んで徐々に教室に来られるようにする。
- ・A君と一緒に団体競技をして友情を育んで教室に来られるようにする。

クラスをよくする

- ・クラスを楽しくする。
- ・居心地の良いクラスにする
- ・過ごしやすい空間に

<シェアリング(生徒の感想より)>

もし自分がA君の立場になったらまずは、みんなと話がしたいと思えます。呼びに行くだけでなく、そこで何か話をするきっかけを作れば教室に行く気もおきると思えます。

A君が教室に来たりしたときに、みんなあまり話しかけたりしないから、少しずつでも話をするようになったら教室にいる時間が長くなるかなと思います。毎回呼びに行くのは男子なので、なるべく女子も行くようになれば仲良くなれると思います。

みんなこの気持ちが外面だけでなく心からそう思っているほしいし、みんながほっとルーム登校生徒のためにそう考えているなら、いつかその気持ちは届くと思う。

<教師からクラスへ>

『シェアリングのあとの意見交換の場で、「昼休みやっている野球にA君を誘えばよい。」という意見が出た時、クラスメイトから歓声があがったのは、みんなも良い考えだと思っているからだろう。すぐで

も実践していこう。』とクラスに投げかけた。『給食や昼休みに積極的に話をしようという。』という具体策も出た。呼びに行くことは続けていたが、その後、会話をしている場面が少なかったため、そのことに気づき、改善していこうという案がでたのは成果であった。「外面だけでなく心からそう思っほしい。」という意見を大切に実践につなげていこう。』と生徒に話した。

Do (実践)

昼休みに男子が「ほっとルーム」登校生徒を野球に誘いに行く回数は増え、一緒に野球を行えた。授業への参加の働きかけも意識して行った。その結果、以前よりクラスメイトと触れ合う機会は増え、教室で授業を受ける回数は増えた。

(中略 総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)

Check (振り返り)

Training の直後は、意識した働きかけが顕著であり、クラスメイトとのかかわりは、着実に増えた。しかし、うち解けて仲良く話をする生徒ができるまでには至っていない。アンケートの「わかっていてもなかなか話しかけることができない。」というところに改善点が隠されているように思える。「本当に相手の立場に立っているのか。」「相手のことを思いやって行動しているのか。」という所に視点を当ててさらに改善を図っていきたい。

(3) 考察

円環的なピア・サポートを通して「温かい人間関係作り」を行った結果について

生徒たちが一連のトレーニングを通して温かい人間関係作りをするために必要なことを発見したことが収穫であった。「心温める言葉・傷つく言葉」で生徒たちは、「人の気持ちを温める言葉も傷つける言葉も日常生活の何気ない言葉から出てくる。」「相手のことを考えて言動することが大切」という大事なことに気づいた。そして、エゴグラムで自分では気がつかなかった長所や短所を認識し、「リフレーミング」や「良いところ探し」で、「自分の短所も友達の短所も長所に考えることができる」など自分やクラスメイトのことも肯定的に考えられるようになってきた。

『「ほっとルーム」登校生徒を支援しよう。』では、「ほっとルーム」登校生徒のことを考えて、学級で相談し、「日常生活の会話こそ大事」、また「相手のことを考えることが大事」という支援方針を打ち出した。これは、「心温まる言葉」の時に気づいたことと一致するものであり、一連のピア・サポートを通して温かい人間関係をきずく方法を確実に生徒たちは身につけてきていると考える。「2学期の自分を振り返ろう」という振り返りカードにも、「相手の気持ちを考えて行動することが増えた。」と書いているクラスの生徒が多数見られた。そして、温かい人間関係作りは、まだ継続中であり、3学期には、「心温まる言葉」がさらに増えるように「毎日、生徒が順番に心温まる詩を朗読すること」を学級会で決め、実行している。このように生徒が新たな案を出し、さらに温かい人間関係作り工夫して取り組めるようになったのは、円環的にピア・サポート活動を取り入れたことが有効に機能したためと考える。

「ほっとルーム」登校生徒が教室に入りやすい環境になったかどうかについて

「ほっとルーム」登校生徒が、教室に入りやすい雰囲気になったかという視点で見ると、『「ほっとルーム」登校生徒を支援しよう』というTrainingが特に功を奏した。学級会のブレインストーミングで考えを出し合った結果、「ほっとルーム」登校生徒のことを考えるような意識が高まった。そして、クラスメイトが野球に誘ったり、授業に出るよう働きかけたりする回数は増え、教室でクラスメイトと触れ合う機会が確実に増えた。しかし、心をうち解けて話ができるようなクラスメイトができるまでには至っていない。今後は、生徒たちが考えていることを行動に移すことで、クラスの間関係の雰囲気がさらに温かいものとなり、ほっとルーム登校生徒が安心して過ごせるクラスの雰囲気になると考える。いかにして実行できるかが今後の課

題と言えるであろう。

まとめと今後の課題

学習面における自信について

この一年で、生徒は、「ほっとルーム」で学習する時間が増え、各教科ともに確実に力をつけ、実力テストで見る進歩は著しかった。特に4月には、かけ算九九さえ不完全だったが、秋には連立方程式が解けるまでに進歩した。また、美術では、作品作りに熱心に取り組み、学校代表として市の展覧会に出品された。その結果、自信もつき、授業に出る回数も増えた。このような成長をもたらしたのは、生徒の実態に応じて、成果や課題を明確にして、定期的に教師チーム支援会議で相談し、課題解決策や方針を立てて支援にあたったことが大きかった。課題として、英語など、まだ自信がない教科もあるので、新たな方針を立てて支援していきたい。

人間関係における自信について

温かい人間関係作りについてクラスメイトは、「ふだんの何気ない言葉が大事」「相手のことを考えて言動する」「自他ともに肯定的な見方をする」という3つの重要なポイントに気づいている。そして、「ほっとルーム」登校生徒を授業や遊びに誘う場面は少しずつ増え、「ほっとルーム」登校生徒が、クラスメイトと触れ合う機会は着実に増えた。この3つのポイントとなる考えをさらに実行に移すことにより、うち解けて話をするような友達ができ、「ほっとルーム」登校生徒が、よりクラスに入りやすくなると思われる。また「ほっとルーム」登校生徒に対してソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、人間関係作りにも積極的に取り組めるようにし、自信をつけられるようにしていきたい。

自立・自主性について

円環的なチーム支援による学習支援で学習に対して自信がついたこと、ピア・サポートTrainingによりクラスメイトとのかかわりが増えたりしたことによって、「やればできる。」という気持ちを持つようになりつつあり、「ほっとルーム」を出て教室で授業を受けたり校庭でクラスメイトと過ごしたりする回数が増えた。加えて1年間を通して自己決定・自己判断する機会を意図的に取り入れたため、11月の進路相談では自ら自分の進みたい進路について話すことができた。そして、希望の進路の実現に向け家庭でも学習をするようになったり早起きするようになったりして毎日の生活が少しずつ改善されつつある。そして、「もし高校に受かったらこんなことをやりたい。」「こんな資格を取りたい。」などと将来に対して意欲的なことも言うようになり自立に向けて着実に進んでいるように思われる。

主な参考文献

- ・石隈利紀 田村節子 著 『チーム援助入門』学校心理学・実践編 図書文化（2003）
- ・森川澄男 菱田準子 著 『ピア・サポート 指導案&シート集』 ほんの森出版（2004）
- ・ロバート・R・カーカフ 著 『ヘルピングの心理学』 講談社現代新書（1997）
- ・友田不二男 著 『カウンセリングの技術』 誠信書房（2000）
- ・中学道徳 『明日をひらく』 東京書籍（2002）
- ・群馬県教育センター 不登校問題 課題解決支援資料（2004）